

## 柴田信さんのこと

(音信不通 ④)

奈良 敏行



十月十二日の夕方、柴田信さんの訃報が届いた。柴田さんと、公開講座「本の街・神保町を考える」に取り組んでいる、飯澤文夫さんが電話で教えてくれた。飯澤さんとは、学生の頃に、大学横断的に仲間が集まり作っていた総合雑誌でのつながりがあった。

同じ時間に、携帯に石橋毅史さんが連絡してくださっていた。石橋さんは『本屋は死なない』新潮社の著者で、定有堂のことも紹介してくださった人だ。

石橋さんは、晶文社から、柴田さんの本屋人生を追った

『口笛を吹きながら本を売る』を上梓している。この本の中で、石橋さんは、わたしのことを柴田さんの弟子の一人、と書いてくださっている。いつも柴田さんのほうを向いて仕事をしている、という意味だ。

一九九一年、柴田さんと一面識もなかったのに、わたしは『ヨキミセサカエル』日本エディターズスクール出版部の出版祝賀会に参加した。地方小・出版流通センターの川上賢一さんが、案内をくださったのと、そのころ私淑していた井狩春男さんが、この会だけはぜひ参加したほうがいいよ、と助言してくださったからだ。当時、見たがいいよ、聞いたがいいよといわれたことは、迷いなく足を運んでいた。

柴田さんはいつ頃から「普通の本屋」と言い出していたのだろう。還暦を過ぎた書店員の再雇用で、人件費を浮かした「シルバー書店」の構想であったように思うが、どうだろう。

しばらくして、地元鳥取で大山シンポジウムが開かれ、柴田さんの司会で話をする事となった。川上さんと永井伸和さんの指名だったと思う。帰りは足を伸ばしていただき、鳥取市の賀露港の民宿でカニ鍋を共にした。

この会では、テーマとは別に、自分ではかつての宿題であった「普通の本屋」に答えることが主眼だった。普通の

本屋とは何か？ それは往来にあることだ、というのがわたしの回答だった。往来ではじまる人との触れ合いの物語、それを「物語のある本屋」として自分のことばで語った。

その後、とくに正面きってそんな議論を柴田さんとしたことはない。ただ、柴田さんとその盟友である永井伸和さんは、いつも一緒に、本屋を考える集いに声をかけてくださった。わたしはいつもお二人それぞれに、「奈良はもう終わってますから…」とお伝え下さいと告げていた。「終わっている」って何だったんだらう。「普通の本屋」とこの二つが、いまも気にかかる。

石橋さんは柴田さんのことを、その『口笛本』（かつてに省略）の中で、あまりに普通の人だといっている。一冊の本の主人公なのだから稀有の人であるのは疑いないのだが、評価の中心軸に石橋さんは最後まで戸惑いをかくさない。「あの人のところへ行けば何かわかる、誰か紹介してくれる」、「情報と人脈の交差点になっている人」、これが評価の核心なのだ。

定有堂によく顔出ししていた高校生がいた。彼は卒業の間際、東京へ出たら本屋でバイトをしたいと告げた。わたしは神保町の柴田さんの本屋岩波ブックセンターで働けるように頼んだ。柴田さんは彼に会ってくれた。「いい青

年だ。学校からだが高田馬場が近いから、芳林堂に頼んだよ」と柴田さんは結果を教えてくれた。確かに石橋さんのいう通りの人だった。人を甘えさせ、そしてけっして手を離さない。

石橋さんの本のタイトルは、『口笛を吹きながら本を売る』だ。最初わたしは「？」と思った。何のことだろう。「表向きは口笛を吹きながら売ろう。ということとは、それを支える強い仕組みが裏側にある、ということね」と柴田さんは語っている。うまいタイトルだと気がついた。

柴田さんは二つのことを言っている。一つは本屋であることを楽しむこと。もう一つは商売としての書店。商売の目的は大きくなること、小売書店が企業として自立すること。最初の単著『ヨキミセサカエル』は、厳しく後者を説く。「店に読者を存在させる」そのすべを執拗に語る。「基本に戻って店頭を見直す」、その基本が展開される。それもまた柴田さんがいう「普通の本屋」の要件だ。わたしはこの側面はにがてで、出版祝賀会するとき、なぜ井狩さんがあれほど敬意をはらうのかわからなかった。井狩さんやわたしは「本屋であることを楽しむ」ことが一番大事で、それ以外はまあどうでもいいことだった。二つ目は目黒恭文堂の田中淳一郎さんが実現されていると思う。

「普通の本屋」が大事。すごい課題提起だと思う。誰

も否定できない。その公案の答えを聞き出すために石橋さんは数年通った。「ところが柴田さんは、なかなか本題に入ろうとしなかった」「小さな、具体的な場面を話すのが好きなのだ」と聞き手はぼやく。

「本題」はじつはないのかもしれない。わたしはそう思う。「普通の本屋」という言葉に呪縛された人のみが、「普通の本屋」という夢をみる。この夢に呪縛されているな、と感じた人間に、柴田さんは暖かいまなざしを向けてくれたのだと思う。じつは「解」はない、と知りながら……。

石橋さんのことを人に語るとき、「本屋の守護神」ということばをわたしは使う。小さな本屋が抱く夢など、あまりに個別的過ぎて、あぶくのようなものだ。本筋の大きな出版界の動向となんの関係もない。このフラジヤイルな短命な夢を、石橋さんは丹念に記録しつづけている。奇跡のようなレポート「本屋な日々」もそれだ。トランスビューの支えでつづく連載だ。石橋さんの眼が、本屋の夢を孤立から救い、その夢はけして一人のものではない、とつづぶやく。

「普通の本屋」は主語ではないのだ。柴田さんが、「いいね」と目を細める、その述語が「普通の本屋」なのだ。柴田さんが、自分の本屋人生を石橋さんに語り残した。石橋さんが何度も何度も、「で、普通の本屋ってなんです

か？」と問う。「君がいま見ているもの、これから出合おうとしているもの、それが普通の本屋、ということだよね」と、柴田さんは内心おもしろがっていたのかもしれない。

柴田さんの見てきた二つの現実、本屋であることを楽しむ、そして企業として自立すること。やがて柴田さんは、それはもうどうでもいいことだと思ふようになったのかもしれない。いまここを楽しく生きることが大事、それも皆んなで楽しく。本来、二つの課題の果てにあるものが、「みんなで楽しく」だったのだから。そしていままさに楽しい。公開講座「本の街・神保町を考える」の盟友、そして私の畏友飯澤文夫さんは、この境地に至った柴田さんと深い交友を楽しんできたのだと思う。二つの現実の乖離の彼方に立ったとき、柴田さんの問題は「終わった」のだと思う。

柴田さんは、いつも現在に生きていたのだ。若い仲間と話すときも、その人の年齢で考え感じていたのではないだろうか。地方・小出版流通センターの川上賢一さんが、その通信で「日本の書店員で最高齢、享年八六歳」と記したとき、一種夢から醒めるのを感じ肌寒くなった。柴田さんが見続けたはるかな「普通の本屋」というものの生成の現場は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口

笛本』が残って、本当によかったと万感の思いがわきあがった。

(参考)

石橋毅史 『「本屋」は死なない』 新潮社 2011

石橋毅史 『口笛を吹きながら本を売る』 晶文社 2015

柴田信 『ヨキミセサカエル』 日本エディタースクール出版部

1991

井狩春男 『返品のない月曜日』 筑摩書房 1985

奈良敏行 田中淳一郎 『街の本屋はねむらない』

アルメディア 997